

・ With コロナの学びの様式とは？ ・

秋学期の開始に伴い、少人数の演習授業や大学院の授業が対面式に戻り、大学で学ぶ実感が再び戻ってきたような気がします。リモート授業ではどうしても発言が一方的になってしまい、双方向でアクティブに議論をすることが技術的に難しかった部分がありました。さらに、テキストを読んで議論をするという一連の作業はセミナーなどの授業でももちろん重要ですが、「時間の無駄」がないリモート授業は、型に嵌まりすぎて息苦しく感じる時もありました。9月末から、学生同士の対面でのコミュニケーションが増えてきており、自分も含めて個人単位で研究をしている法学系の院生の顔にも活気が戻ったように思いました。

リモート授業が続いていた時期によく考えていたのは、中高生や社会人は普通に学校に戻れて、会社にも行けるのに、なぜ大学生だけ大学に戻れないのかということです。論理的に考えれば、周りの人々の安全を最優先にするという正当な理由に辿りつきませんが、納得いかない部分がありました。納得できなかった部分は何だったのかははっきりわからなかったのですが、大学に戻ってみてやっと言語化することができました。それは、大学での学びはテキストや教員の解説だけで成り立っているわけではなく、学生同士の話し合いはもちろん、大学という環境に身を置くことで、新しい出会いと刺激で得られる新たな発見で成り立っているということでした。

リモートワークが世の中で普及している風潮に対して、決して否定しているわけではありません。キャンパスライフも安全のためにリモートと対面との並行は実施して行くべきだと思います。会社員、教員や学生など、それぞれの役割が変化していますが、今よりも良い社会環境づくりを目指すというピュアな目標が変化したわけではありません。今後に向けて、私も含めて、不自由がある生活スタイルの中で、それぞれ本来の目標を達成するために、どう自分たちの行動を変えれば良いのかを考えていきたいと思っています。